学生探偵　神谷俊介の事件手帳

九条　蓮十朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学生探偵　神谷俊介の事件手帳

【Ｎコード】
Ｎ３４６１Ｇ

【作者名】
九条　蓮十朗

【あらすじ】
学生神谷俊介は何処にでもいる普通の学生・・・・青春ミステリーここに！！！！！！！

学生探偵　神谷俊介の事件手帳

　秋が終わり、枯れ葉が落ち、外は何処からとも無く吹く冷たい風が吹き付ける季節で出るのが嫌になる
　しかし、俺ら学生にそんなのは関係ない　ある意味、辛い

登場人物
神谷　俊介　（かみたに　しゅんすけ）
青木　香澄　（あおき　かすみ　）
東島　茜　（とうじま　あかね　）
西山　加奈子（にしやま　かなこ　）
上杉　真吾　（うえすぎ　しんご　）

２０ＸＸ年　１２月１日
　過ごしやすかった秋が終わり、学校も後、１週間ほどで冬休み
そして、湯煙殺人から２ヶ月が経っていたころ
　俺達は、美術の授業を受けていた　テーマが「身近な人や物」である。
しかし、美術が苦手な俺にテーマは関係無い　とにかく描いてそれらしい様にすればいい
そんな事を考えている人は、後の地獄を見るだろう
　それは、何故か？　その答えは美術教師兼俺らの担任で草薙（くさなぎ）博（ひろし）にある。
草薙の通称はダビンチ先生と異名を取るほど美術、特にレオナルド・ダビンチに厳しい
　もし、美術を侮辱するなら地獄をみる覚悟は必要だ。
そんな事もあり、絵が得意な奴や好きな奴はそうでもないが、さっ

きも言ったが俺は美術特に絵が大の苦手である　だからこの時間は必死に受けなければならない
（しかも3時間！　あぁ憂鬱だ・・・）
しかし香澄や西山もまた美術に苦戦している。
（俺よりかは、上手い絵を描くので少々羨ましい）
だが、そんな事ことは知らずに東島はサラサラッと絵を描いている
香澄「茜ちゃんの絵が綺麗ねぇ～」
西山「そうやねぇ　ウチらなんか何を描いているかサッパリや　それに比べて茜は天才やね！」
東島「そんな・・・偶然だって」
控えめな東島に元気ハツラツ西山がケラケラと笑っている　その横では俺は自分が描く
ヘタクソな絵と格闘していた　（我ながら悲しい光景である）

東島　茜と西山　加奈子
俺や香澄と同じクラスで香澄とは小学校からの付き合いらしい
　控えめで可憐な印象を持つ東島、それとは対照に元気があり少々の事では凹まない西山
そして香澄・・・・
　俺は心の中で彼女たちを「おてんば3人娘」と呼んでいる（ただしネーミングについての質問はノーコメントである）
　なんやかんやと美術の授業は終わり　草薙が両手をパンパンと叩き自分に注目を集める
草薙「よ～し　みんな使った道具は元の位置の戻せぇ～　とその前に・・・・
東島！　ちょっとこっちへ」
東島「はい？」
草薙「みんなよぉく聞け！　実は近くに開催される高校美術展に東山の作品が展示される事になった！　おめでとうぉ　東島！！」
東島「！！」

香澄「うそ？！」
西山「まじで？！　やったやん！　茜！」
俊介「ほぉ～！　すげぇな」
しかし一人だけこの感激のムードを壊す者がいた
上杉「・・・なぁ俊介」
上杉がチョンチョンとヒジをつついてくる
俊介「何だよ？」
上杉「・・・・・なぁ高校武道展ってなんだ？　東島それにでんのか？」
俊介「・・・・・」
一瞬にして凍りつく教室　そして何よりも凍っていたのが東島だった。
俊介「真吾・・・・よぉぉぉぉく聞けよ　高校“武道”展じゃない“美術”展だ」
上杉「あぁ！　そうか！　いやぁ悪い悪い　聞き違えたわ！」
ケラケラと笑う上杉に西山が何処からとも無くハリセンでポカッと頭を殴る
上杉「イッテー！　何だよ！」
西山「聞き違えたあるかいな！！　どんな耳しとんねん！！」
上杉「しゃ～ねぇだろ！　間違ったもんは仕方ない！」
西山「威張るな！！限度ちゅっうもんがあるやろが　ボケ！」
再びハリセンでポカポカと叩く西山に叩かれまくる上杉
光景は漫才をする夫婦　そのものだ
　夫婦漫才は１０分で終了し皆で使った道具や備品を片付けする時だった。
きゃぁぁ～！！！！
突然の叫び声　その声の主は東島だった　手の平から血を流し、うずくまりながら泣いていた。
西山や香澄たちが心配し東島に駆け寄る　その中で少しおかしな言葉を聞いた

・・・・なぜ？あんな言葉が？・・・・・・
その後、東島は保健室で手当てをしてもらった
香澄「大丈夫？」
東島「・・うん　ありがとう・・・大丈夫だよ」
今にも泣きそうな声に東島が答えた
西山「それにしても　一体ダレやねん？！　こんな悪戯するのはタチが悪いのもほどがあるで！」
・・いま、犯人が西山の目の前にいれば確実に“殺される”な。
それにしてもさっきの騒ぎの中で出てきた“言葉”・・・気になる
香澄「俊介　どうしたの？　怖い顔して？」
俊介「えっ？　あぁ　いやなんでも無いよ　それじゃあとりあえず俺達は先生に事情話してくるからジッとしとけよ　すぐ戻るからな」
東島「あっ　・・・・うん」
赤い顔をした東島を残し、俺達は保健室を出た
俊介「・・・・香澄に西山、すこし話がある」
西山「なんや　神谷？」
香澄「なんなの？」
俊介「実はさっきの騒ぎ・・・・ちょっと気になる物が見つかったの覚えてるか？」
香澄「うん　たしかカードだったよね」
俊介「ああ　小文字のLや数字の1とも読めるカード」
西山「それがどないしたんや？　ただのカードやろ？」
俊介「“ただの”だったらな・・・・」
香澄「えっ？　どういうこと？」
西山「なんか意味あるんか？！」
俊介「いや正直はどうだかは、わからない・・・・けど」
香澄「けど？」
俊介「たぶんまた、こんな事がある可能性があるんだ」

西山・香澄「・・・・！」
俊介「まだ可能性の話だけど　とりあえず俺は今回の騒ぎを調べてみる
　　だから、西山達は東島の側を離れないでくれ　極力な・・・」
西山「・・・わかった　まかしとき！」
俊介「後、もう一度言うけど東島には言うなよ　変に気にすると大変だからな」
香澄「うんわかった！　　俊介も気をつけてね」
俊介「ああ　わかった　それじゃ先生に言って、保健室の戻ろう東島が、淋しがるからな」
　こうして俺と香澄に西山はこの騒ぎを調べることにした　これが意外な真実なると　も知らずに・・・・・・・。
翌朝　いつも道理に登校する俺　昨日はカードの意味を考えているうちに寝てしまい
挙句の果てには寝坊・・・・・・最悪だ・・・・
　ホームルームまで5分　ギリギリセーフで教室に入り自分の机に座り、そのままへバルのであった・・・・体力つけよう・・・・そんな事を考えフッと香澄たちの方を見る。　その時は何かが違った
　普段なら明るいオーラのはずが何故か暗いオーラとなっている
香澄「あぁ　俊介　おはよ・・・」
俊介「あぁ　おはよ・・・（一体どうしたんだ？　元気な香澄まで沈むなんて珍しい）」
　どうしたんだろう？　そして東島の机を見るとそこにはビリビリに破られたノートが
置いてあった　・・・・・・なるほどこれのせいか・・・・
俊介「ほらよ・・・」
俺は鞄から新しいノートをと東島の机に置いた
東島「・・・！」
俊介「ノートが余っていたんで困っていたんだが助かったよ　やるよ今日それがないと授業受けられないしな」

東島「・・・・うん・・ありがとう」
東島は少し赤い顔をし、下を向いた　・・・・・なぜだ？
それをニヤニヤと笑う西山にプクッと膨れ不機嫌になる香澄・・・・・・なぜだ！？
授業が始まると東島は少し微笑みながらさっきあげたノートにサラサラと書き込んでいる
・・・・そんなに授業が楽しいのだろうか？・・・・
午前の授業が終わり昼休みになった
ノートの件からその後は何も無かった
やはり悪戯？　しかし何かが引っかかる　どうしても気になる
俺は胸ポケットから昨日の騒ぎに落ちていたカードを見る　果たしてこれになんの意味が？
とりあえず昼休みは香澄たちに合流して調べたほうが良さそうだな・・・・・
そう考え、香澄達が裏庭に入っていくのを見かけた
裏庭に行くとフトッ上を見る　すると屋上の端でグラグラと落ちそうな植木鉢が東島の頭にさしかかった時　その瞬間、植木鉢が落ちる
俊介「危ない！！」
一瞬の出来事だった・・・・間一髪で東島を押し倒し、植木鉢は地面に叩きつけられた
俊介「あぶない所だったな」
東島「・・・・・・」
俺は立ち上がり植木鉢が落ちた所を見ると人影が見えた　急ぐ俺
階段を上がり屋上に向かう
ドアを開けるとそこには上杉がいた・・・・・・・・まさか・・・・・
俊介「おまえ　どうして？・・・・」
上杉「えっ？　なんの話？」
俊介「何の話ってお前、植木鉢落としただろ！」
上杉「植木鉢？　いいや落としてない　ってか今さっき此処に着た

んだぜ？」
俊介「えっ？　本当なのか？・・・・」
上杉「ああ　ここに呼び出されたんだよ　ほら、この手紙にな」
上杉はヒラヒラと手紙を出す
俊介「誰からだ？」
上杉「さぁ～　差出人は“あなたを想う人”って書いてあるぜ　いや～たぶん女子だろうな　以外にモテるんだなぁ～俺って初めてだぜラブレターもらったのは」
俊介「・・・・（はぁ～　そうだよなコイツが東島に怪我負わすようなことするわけ無いよな　なんせ・・・・・・バカだからな）」
上杉「・・・・なんだよニヤニヤしてうらやましんか？」
俊介「ちげぇ～よ　そんな事よりその“ラブレター”見せてくれないか？」
上杉「お～　いいぜ！　特別だからな！」
上杉から手紙を預かり中身を見ると
“今日の昼休みにあなたをお待ちしています”　あなたを想う人より
俊介「・・・・・・（ふつうは悪戯と想わなかったのか？）」
上杉「どうだ？　すごいだろ！」
俊介「ああ～　すごいよ（お前がな・・・・）
上杉ちょっとの間貸してくれないか？」
上杉「なに～！　さては、神谷お前・・・・このラブレターの子と会う気だろぉ～」
俊介「あのなぁ～　しかたない今度おまえの約束に付き合うそれでいいだろ？」
上杉「えっ？　うそ？　マジで？！　よっしゃぁ　それじゃあ仕方ないな
ただし“約束”守れよ！！」
俊介「ああ　わかってるよ」
上杉から手紙を預かり香澄たちにのいる裏庭に戻った

香澄「あっ俊介　どうだった？　犯人は？」
俊介「いや　上にいたのは犯人じゃない　利用された上杉だったよ」
西山「利用されたってあのアホは～」
香澄「あっそれと　俊介、植木鉢からこんなカードが・・・」
香澄に渡されたカード　そこには「K」と書かれていた
俊介「K！　待てよ・・・・ちょっと待ってろ！」
俺は急いで東島の机に向かった　・・・・推理が正しければきっと・・・・あるはず！
　そして東島の机の中には・・・・・あった　そうか　カードはこうゆう意味があったのか
　これですべてが繋がる　さて犯人は今日は来るだろうか？

放課後　６時　学校は大概の生徒は帰りクラブ活動も終わる直前の事だった
　美術室に一人の黒い影　その影はノソノソとある絵に向かってブツブツと囁いていた
「あいつさえ・・・・・・あいつさえ・・・・・こんな絵なんか・・・・」
ポケットからカッターを取り出し絵を切り裂く瞬間！
　「待て！！」
どこからか声がした　そして美術室のドアが開く
俊介「やっぱり君だったんだね　里中　千恵さん　」
パッと電気がつき一人の女子生徒がたたずんでいた　俺の後ろには香澄・西山・東島がいる
里中「やっぱりって何よ・・・・あたしはただ・・・・そう忘れ物を取りに来ただけよ」
俊介「いいや　、忘れ物ではなく、ある目的でこの美術室に入ったんだよ
　いま、持っているカッターで東島の絵を切りつけるという目的で」

里中「・・・・・！」
　空気が凍り、場が静まり返る　そして
里中「なにをバカな事・・・・だいたい東島さんの絵を切って何の意味が？！」
俊介「さぁね　でもこの一連の騒ぎはすべてお前が仕組んだことだよ　違うか？」
里中「・・・・！！」
俊介「まず最初の騒ぎから　あの時、東島が怪我したときお前、変なこと言ったよな」
西山「変なこと？」
俊介「ああ　“鉄が傷口にはいる前に”って言ったんだよ」
香澄「それの何処が？」
俊介「考えてみてくれ　あの時誰も“カッターで切った”何て言ってなかった
　なのに“鉄”言葉が出たのに不思議だったんだ　あとでわかった事だけど
　スケッチ用の消しゴムにカッターの刃が入っていた　どうして東島が
　手を切ったのがカッターだとわかったんだ？」
里中「・・・そ　それは・・・・」
俊介「まだある　最初の騒ぎや落ちてきた植木鉢の中に入っていたカードの意味」
香澄「カードの意味？」
俊介「このカードは、里中が東島に対してのメッセージだったんだよ」
西山「メッセージやて？！」
俊介「　ここに三枚のカードがあるこれをこう並び替えると「ＫＬＬ」になる
　そして最後の一枚でこの単語の意味が出てくる」
その瞬間、里中の手からカードがでてきた「Ｉ」と書かれたカード

（Ｋ　Ｉ　Ｌ　Ｌ）
俊介「この単語の意味は「殺す」という意味　里中は東島に殺意があったんだよ」
西山「ちょっと待って！　でも植木鉢はどう説明するんや？」
俊介「あれは、まず屋上に植木鉢とドアを糸か何かで結びドアを閉める　後はこの手紙で
　適当な人を屋上まで呼んで　後はドアを開けた瞬間にドアについた糸がはずれ植木鉢が落ちるというトリックだ　屋上にいた人は当然犯人にされるって寸法さ」
西山「里中・・・・あんた茜以外にも・・・・」
里中「べ　べつに殺すつもりは無かったわ！　　ただ絵が描けなくなるくらいにボロボロになっちゃえばいいと考えたからよ」
西山「あんた！！」
西山が里中につかみ掛かった瞬間
東島「もういいよ！！」
とうぜん東島が叫ぶ　周りは静まり東島は里中に近づいた
東島「　里中さん　なんで私を狙ったの？」
里中「・・・・高校美術展」
東島「えっ？！」
里中「私は今までね、絵ばっかり描いてきたそれは、もちろん高校美術展に展示するため　最初は私が美術展に行くはずだった　でも東島さんの絵が美術展に展示するって聞いた時　愕然としたわ
それからはあなたを恨み続けカードや騒ぎを起こしたのよ　すべては神谷くんの言うとおりよ」
東島「そうだったの・・・・ごめんなさい私のせいで・・・・あなたを・・・・」
里中「いいえ　こちらこそ本当にごめんなさい！！　　・・・いまから警察に行って自首して来るわ・・・」
東島「待って！！　　いいんだよ私はあなたを許すだから　いいのよ」

里中「・・・・う・・うっ・・・・・うっわぁぁぁぁっぁぁぁぁっぁっ！！！！」

泣く里中をそっと東島が包む　こうしてこの騒ぎは幕をとじたのであった・・・・

（後書き）

みなさんどうもw　九条　蓮十郎です
初めての短編ですがいかがでしたか？
「面白かった」、「もう一度読みたい」そう感じて頂けると、とても嬉しいです！　感想を頂けるともっと嬉しいです（しつこくてすみませんw）
連載中の「探偵紅柳真之介の事件譚」も一度よんでみてください
では以上、九条　蓮十朗でした～（古畑風w）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3461g/

学生探偵　神谷俊介の事件手帳

2010年10月30日05時40分発行